

第17回 木曾川上流自然再生検討会  
議事要旨

日時： 令和7年2月19日（水） 10:00～12:00

場所： 木曾川上流河川事務所(木曾川水系ダム統合管理事務所2階会議室)

出席者： 藤田 裕一郎 岐阜大学名誉教授(座長)  
大塚 之稔 日本野鳥の会 岐阜県 支部顧問  
梶浦 敬一 ぎふ哺乳動物調査研究会 代表  
高野 裕行 自然学総合研究所 主任研究員  
永山 滋也 岐阜大学 特任助教  
森 誠一 岐阜協立大学 教授

【規約の改正について】

(事務局)委員の任期を令和10年3月31日に変更する。また、委員の変更にあたり、植物専門家として前任の水野瑞夫氏から代わって高野裕之氏に、昆虫類専門家として前任の野平照雄氏から代わって高井泰氏に委嘱する。

→ 委員全員の同意を得られたため、規約第8条に基づき改正。

【議事】

(1) 第16回 自然再生検討会における委員意見について

事務局から、資料-2を用いて、第16回自然再生検討会における委員意見に対する現在の対応状況や今後の対応方針について説明があり、それらについての質疑の結果、内容が了承された。

(2) 報告事項について

事務局から、資料-3を用いて、自然再生計画の進捗と今後の予定、ワンド等の水際湿地の再生(木曾川、揖斐川)、緩流域環境の再生(杭瀬川、伊自良川)、コアジサシの繁殖状況調査(木曾三川)、オオサンショウウオ対策(木曾川)の実施状況やモニタリング結果、実施効果と課題等についての説明があり、それらについての質疑の結果、内容が了承された。

(3) 次年度のモニタリング計画(案)

事務局から、資料-3を用いて、次年度のモニタリング計画(案)についての説明があり、それらについての質疑の結果、内容が了承された。

(4) その他

事務局から、コクチバスの生息状況(揖斐川)、事業スケジュールの見直し、自然再生計画の見直しについて説明があり、それらについての質疑の結果、内容が了承された。

以上の質疑における主な意見は以下のとおり。

## 【主な意見】

- 既に事業が完了している揖斐川、根尾川の「連続性の確保」については、近年瀬切れが問題になっているため、今後対応していく必要がある。
- ワンド等の水際湿地再生について、研究分野ではワンド環境の改善に寄与する知見が得られているので、それらの知見を事業に取り入れていくこと、また、モニタリングの調査項目・内容について、物理環境・生物の生息状況の両面をよく検討し、継続していくことが必要である。  
→モニタリングから得られた知見を基に、検討を進める。
- 平成30年前後にイタセンパラが顕著に増加した要因が分かれば、今後のワンド環境再生に活用できるので、イタセンパラ部会の方で検討してもらいたい。また、木曽川の上流部と下流部でイタセンパラや二枚貝類の分布に差が認められる要因も突き詰めることで、イタセンパラの生息に適した環境を把握できると考える。
- 揖斐川の水路型のワンド再生について、河岸部は存置することとしているが、地盤が高い場所では樹木が繁茂しやすいため、良好なエコトーンの場所以外は、基本的に地盤を切り下げて冠水頻度を上げる方がよい。
- 揖斐川、長良川にはワンドが少ない。そのため、支川である杭瀬川、伊自良川の緩流域環境が、生物の生息場として重要となる。一方、ワンド周辺は樹林化していることが多く、そこに外来種のシベリアイタチが増えて、在来種に影響を与えていると考えており、留意点として認識する必要がある。
- 近年は出水の頻度が多くなり、コアジサシ 貴重種情報記載につき取扱注意 に産卵しても流されているが、堤内地では 貴重種情報記載につき取扱注意 で少数が繁殖している 貴重種情報記載につき取扱注意 の事例を踏まえると、高水敷を整備し、人が入らないように工夫することで、河道内でコアジサシが繁殖できる場所を創出できる可能性があると思われる。
- かつては、河川敷の樹木を薪炭として利用しており、河川環境の維持に、人の営みも寄与していたと考えられる。地盤が高い場所は樹林化しやすいので、人の手を入れて管理していくことが必要と考えられる。
- 次年度のモニタリング計画について、揖斐川のワンド等の水際湿地の再生のモニタリングでは、ワンド内の地形変化が重要であるため、物理環境の面的な変化もモニタリングして把握する必要がある。

## 【その他いただいた意見】

(ワンド等の水際湿地の再生(木曽川・揖斐川)について)

- イタセンパラ保護に関する地域連携は、よい取り組みである。当日参加した子供たちの感想を紹介してもらいたい。また、活動時に地元の新聞社やケーブルテレビの取材を組む等、広報に力を入れると子供たちのモチベーションが上がり、相乗効果があると考えられる。
- 施工の際に、掘削土の中にイシガイ類が含まれる可能性があるため、配慮が必要である。  
→これまでの工事において、事前にイシガイ類を救出した後に掘削を行っている。
- ワンドの掘削や樹木伐開によって、イタセンパラや二枚貝の餌環境や生息環境が改善しているのか教えてもらいたい。

→これまでの調査において、掘削により新しいワンドができるきっかけを与えると、頻繁に冠水して水の循環の良い良好なワンドが形成され、速やかに二枚貝が定着することが明らかになっている。そのようなモニタリング結果から、餌環境も良好になっていると考えている。

#### (緩流域環境の再生（杭瀬川・伊自良川）について)

- ・ 伊自良川の再生箇所は、ヘラブナ釣りで人の利用が多い。モニタリングでは、カダヤシ、ゲンゴロウブナが確認されているが、漁協が放流している可能性はないか。  
→伊自良川での漁協によるゲンゴロウブナの放流は、把握していない。  
→ゲンゴロウブナは、伊自良川では国内外来種であり、カダヤシは、特定外来生物にあたる。ゲンゴロウブナについては、河川管理者として放流を法的に規制できるわけではないが、生物多様性の観点からは望ましくない。カダヤシについては、放流しているのあれば、法令違反にあたるので河川管理者として対応が必要である。

#### (コアジサシの繁殖状況について)

- ・ 長良川については、近年の増水だけでなく、河道掘削による砂州の切り下げが、コアジサシの営巣地の冠水に影響しており、現在の河道においてコアジサシの繁殖場を確保することは難しいと考える。国の管理の範囲内でできることとして、掘削の際に表面の玉石は残して砂州の平坦化を避ける等、今後の河道管理における掘削の方針をしっかりと検討する必要がある。

#### (オオサンショウウオ対策について)

- ・ オオサンショウウオは夜行性だと考えられるが、夜間の行動は把握できているか。  
→安全面の観点から、夜間調査は実施していない。夜行性であることを考慮して、カニかごを設置して捕獲する等で対応している。

#### (次年度のモニタリング計画（案）について)

- ・ 伊自良川の緩流域環境では、水草の分布調査を夏季1回行うことになっているが、モニタリング結果では、夏季よりも秋季の方が水草は多い。  
→水草の分布は、これまで通り、夏季と秋季の2回実施する。
- ・ 揖斐川水系では、瀬切れが頻繁に起きている。上流のダムの運用も関係していることが想定されるので、今後、それらの関係性を検討することが必要だと考える。また、連続性の確保については、魚道が設置されただけでは十分ではなく、機能していなければ連続性が再生されたことにならないので、地元の漁協への聞き取り調査等を行って確認するとよい。  
→施設が大きく、魚道の効果を把握することに苦慮しているが、引き続きご指導をいただきながら検討していきたい。

#### (コクチバスの生息状況について)

- ・ 揖斐川ワンドの調査では、コクチバスは、稚魚だけが調査対象となっているのか。  
→成魚は確認されていない。調査対象場所がワンドであり、遊泳能力の弱い稚魚が確認された結果と考えている。
- ・ 近年、研究の分野では対策の一つとして、コクチバスの産卵場を埋める置砂実験が検討されているので、参考にするとよい。

#### (事業スケジュール・自然再生計画の見直しについて)

- ・ 事業がこのまま終わってしまうと、現状維持されているイタセンパラ、二枚貝の生息環境が急速に悪化すると想定されるので、事業スケジュールを延伸することは必要だと考える。一

方、杭瀬川の緩流域環境の再生のように、木曾川・揖斐川に比べると、目標が明確でない取り組みがある。自然再生計画の見直しにあたって、課題と目標を具体化しておくことが必要である。

以上